



ムカイシノブがコスプレにはまったのは、写真撮影からだった。

コスプレ、つまりコスチュームプレイヤーの写真を撮りだしたのは、半ば趣味。半ば仕事からだった。

フリーライターと言えば聞こえがいいが、早い話が何でも屋である。

弱小のエロが満載の雑誌の小特集であった。

それもあって、コスチュームパーティーや大きな同人誌の即売会への取材も兼ねて足を運んだ。

年季の入ったコスプレファンの話だと、最近のコスプレイヤーは恵まれていると話していた。

昔はアニメのコスチュームなど自分で作るか、高い金を払ってオーダーするかしなかったけれど、最近はコスプレ衣裳も作られたものが売られていると。

確かに、どのコスチュームプレイヤーも同じ感じのできのよい衣裳だった。

ネットで調べる身体に合うようにオーダーできる専門の業者もいるし、フギュアと同じサイトでコスプレ衣裳が売られていたりした。

今まで単に見ていたり写真に撮っていただけで、これらの知識にかけていた。それにしても、コスプレイヤーというのはどういう人種なのだろうと興味が湧いてきた。

仕事ではあるが、かなり個人的に調査してみたくなった。

それが上手く仕事につながったという訳だ。

そこで最初に選んだのは、やはり「コミケ」だった。

コミケとは、コミックマーケットの略称だが、いまや「コミケ」が同人誌の即売会を示すような言葉にもなっている。ここへ参加する同人サークルは2万をこえるし、一般参加者50万人をかるく越えている。

その中でコミケの花とも言われているのが、コスプレだった。

このコスプレイヤーも数千人が参加するし、今では海外からレイヤーがわざわざ参加しに日本へやって来るほどだ。

そして開催日の三日間、シノブはカメラと名刺を持ってすべて参加した。

暑い中、シノブは少し離れてコスプレイヤーに群がるカメラ小僧達の姿も撮影した。

必要ならば動画でも撮った。これはと思えるコスプレイヤーには後で取材させてほしいと名刺も渡しておいた。

(それにしてもオタクども、スカートの中にカメラを突っ込むようにして撮ってやがる。あれじゃ、コスプレイヤーを撮ってるか、女の子もスカートの中身を盗撮しているか分からないじゃないか)

まったくその通りだった。少し離れて仰角で撮るのではなく。何十人の男達がカメラを差し出してスカートの中へ突っ込むような感じで撮影している。

コスプレイヤーの女の子も平気な顔で、いろいろなポーズを決めて微笑んでいる。どこのコスプレイヤーの周りにも男達が群がっていた。まった

くなにも知らない人間を見ると、襲われているようにも見える。

なにを撮っているのか分からないのが、コミケのコスプレブースではお馴染みの光景でもあった。

その中に、時々男性コスプレイヤーも混じっているが、よほどしっかりとアニメのキャラクターになりきっていないとカメラ小僧に無視されてしまう。

男なのに写真を撮られているなと思ったら、外人コスプレイヤーで俳優がコスプレしているのかというような出来映えだったする。

これはさすがにカメラ小僧も無視できないようで、時々、他の女性コスプレイヤーを撮影しに移動する合間にカメラに収めていた。

見渡していると、チラホラ外人のコスプレイヤーが混じっている。足が長くスタイルも良く、アニメのキャラクターの姿をするとそっくりに見えた。

日本人のコスプレイヤーのコスプレは、なにか少しちぐはぐな感じがする。アニメのキャラクターたちのスタイルが、スタイルの良い外人をモデルにしていると分かるものだった。

インタビューを試みると、流ちょうな日本語で応えてくれる。それなりに愉しみながらの取材活動だったが、館内に入るのはわずかの時間で、同人誌などは買わないままだった。

それから二日ほどたって、取材した写真などを整理しているとメールがあった。この前、取材したコスプレイヤーの一人だった。

レイヤーネームは「ケイ」といった。

折り入って相談したいということだった。なにか分からないがとりあえず会う約束をした。

ファミレスで取材することにして、約束の場所へと向かった。さすがにファミリーレストランでコスプレはしていなかったが、やはりそれらしい飾りの多い服装をしていた。

「いいから好きな物注文してね」

そういうとケーキを注文して、後はドリンクバーの飲み物ですませることになった。

「なるほど、というと、もう一段上のステージに立ちたいわけだ」

「ハイ。だって今のままじゃ活動するにも限界があって」

活動というのもおかしなもんだと思う。趣味でやっているそれで良いはずで、もう一つ上のステージとはなんだと言いたくなってくる。

だが、雑誌の記事を書いているとこの手の人種は腐るほど知っている。誰もがタレントやアイドルに切っ掛けさえあれば簡単になれると思いきこんでいる。

つまり自分の写真を使ってどこかへ売り込めないかということだった。

ここでシノブの嗅覚が働いた。風俗嬢を取材していた時、「ふうどる」と言われる女の子もそうだった。

実際にする、体験取材ではいつもより過激で濃厚なサービスを受けた

ことがある。記事にして掲載すると、その女の子の指名が増えるからだ。

そういう女の子が出す、どこかオマタが緩くなるような雰囲気があって、このコスプレイヤーである「ケイ」もまた、同じだった。

話を聞くと、雑誌で紹介してもらうことで、芸能界への切っ掛けがほしいというものだった。

「うーん……。まあ、僕の受け持ちの記事に写真を載せてあげても良いけど、効果あるかなあ。それにうちの雑誌に枚数を載せるにはそれなりのものでないとちょっと、きついね。まあ。ヌードもありだったらグラビア系の事務所へはわりとルートができるかもしれないけど……」

シノブは雑誌を出して説明した。完全なエロ専門雑誌ではないけれどゴシップ記事やら風俗記事も沢山掲載されている雑誌であることを告げた。

写真ももちろんヌードが多い。おもにAV女優たちが、写真と一緒に作品のPRもしている。

それらの記事を見せながら、どういう記事ならば巻頭を飾れるかを説明した。コスプレの特集記事だと、二、三枚が限界だが、ヌードもありとなると二ページくらいはとれるかもしれないとも説明した。

コスプレの取材していても、なかなか絵になる女の子はいないものだが、その中でも見られる女の子だった。だからコスプレイヤーとしても名が知られていた。相手にその気があるならばと、シノブはコスプレ

しながらのヌードを提案してみた。

こういう女の子の写真は採用されるのも分かっていた。読者モデルと同じでギャラを払わないでも掲載できるヌードモデルだからだ。だからA V女優のような宣伝を兼ねての巻頭グラビアが多くなる。

「嫌なら良いんだよ、無理しなくても……。でも、うちの雑誌だとそれしか手がない。それにタレント事務所を知っているといっても、グラビア関係の事務所だからね。正当アイドルの事務所なんかとは接点もないし」

「でも、切っ掛けとかにはなりませんか」

「うーん……。切っ掛けになるかどうかは自信ないけど、正当アイドルからA V女優になって売れて、それからまたタレントや普通の女優業に転向して成功している女の子はいるね。それに、もともとA V女優だけど歌とか歌って、海外で売れている女の子もいるし……」

しばらくそういうA V女優からの転身で成功した女の子たちの話しをした。

実際のところ、成功するかどうかはその女の子次第だし、ちょっと有名なコスプレイヤーがタレントとして成功した話しは聞いたことがなかった。

「良いですよ、わたし。ヌード撮影、OKです」

実にあっけなく承諾した。シノブは別に強くすすめた訳ではない。

むしろケイの方から撮影してほしいと伝えてきた。この手の女の子はどこかこういう面がある。一応、メールで編集長にコスプレのヌード撮影のことを送っておいた。すぐにOKの返信が返って

きた。

話が早い。場所を移して撮影となった。

場所はレンタルスタジオで、時間内ならパーティーをやっても良いという複合的な使い方ができるところだった。

コスプレイヤーが良く利用するところで、小さなコスプレパーティーのようなことにも使われていた。その一つが一番小さな個室をレンタルした。

ちょっと中世の拷問室のような部屋で、撮影なりに利用するための小道具なども用意されていた。この部屋を選んだのも、アニメ「ソードアート・オンライン」のコスプレをするので有名なレイヤーだったからだ。

半裸に近い妖精コスプレだった。

少し胸を大きく開いたり、お尻をわざと見せるような、もともとの衣裳を少しカスタマイズしたようなコスプレをする女の子だった。

そういう差別化を図っていたのだろう。

「じゃあ、少しずつ脱いでいこうか」

何枚か普通で撮ってから、ヌード撮影となった。妖精がつかまり拷問を受けているという設定で撮っている。手を鎖で繋ぎ、衣裳を脱がしていく。ケイの動きは慣れたものだった。もともとセクシー系のコスプレイヤーとして有名で、撮影者の殆どがローアングルからの盗撮写真のような物ばかりだというのが頷ける。

「じゃあ、胸出して……」

「ハイ...、これくらいですか.....」

まさに慣れたものだった。コスプレイヤーというのは、貞操が緩いという噂は本当のようだ。乳房が露わになる。形の良いバストだった。

「　　いいねエ。いいよ.....」

思っていた以上に乳房も大きかった。わざと巨乳に見せている女の子訳ではなかった。時々、ヌーブラなどを使って、巨乳に見せかけているコスプレイヤーも多いと聞く。人気のある有名コスプレイヤーはスタイルも悪くなかった。

「下も脱ぎましょうか.....」

向こうからいってきた。しめたと思って、即OKした。本当に簡単だった。シノブも元々が下心ありで接している。できることはなんでも利用したかった。

「おお、良いね...。その感じ、良いよ.....」

扇情的なポーズをとっていた。どうやら乗ってきたようだ。少し目が濡れて欲情しているかもしれない。時々、胸を触ってみたり、尻を撫でたりしながらの撮影に変わっていった。

ごく自然の流れだった。女の子も初めからそういうことを意識していた。

乳首が立っていた方がエロイからと、乳首を弄ったりもした。

「ちょっと、これ啜えてくれる。そういう写真がほしいんだ」

そういつて、人差し指を差し出すと、躊躇わず啜えた。

それを写していると、ケイは自分の方から深くのくわえ込んでいった。

「ン……ン、ン……」

「………！」

指フェラだった。自分から深く浅く啜えた。

強く吸引するだけでなく、舌も使って舐めてきた。思わず、指を動かして舌と絡めていた。

撮影を始めた頃から強張りかけていた股間が、一気にズボンの中で膨張した。それは外から見ていても分かるほどだった。ケイの手が股間へ伸びる。ジッパーを下げるとバネ仕掛けのように飛び出してきた。

「チュウ　　う……」

「……う、ふ……」

肉棒が啜えられた。指をしゃぶられるよりも強い快感だった。

シノブが誘導したわけではない。亀頭をキュッと吸われた。もう一回り大きくなった気がする。ヒクヒクと震えのがケイの唇に伝わっている。

「…う、グッ……」

続きは製品版で 。